

京都大学 総合人間学部 広報

特集 ご退任を迎えられる先生方から

言葉の向こうを見つめて	依田 義丸	4
タコツボからの脱出	大木 充	6
今は昔	西村 稔	8
金屏風発見始末	松田 清	10
好奇心を磨くことから一歩が始まる	山田 孝子	12
万感の思い抱き我ここを去る	金坂 清則	14
帰 還	内田 賢徳	16
教養部から総人・人環へ	山口 良平	18

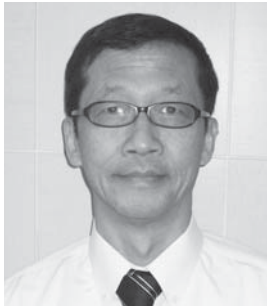
特集 ご退任を迎えられる先生方から

今号は特集「ご退任を迎えられる先生方から」と題して、平成 23 年度をもって定年退職される先生方よりご寄稿いただきました。



言葉の向こうを見つめて

依田 義丸（人間科学系）



父の主宰していました詩誌の同人でした詩人天野忠氏に「苦笑」という小品があります。それなりに清貧に生きてきた詩人らしい「私」が、神様に生涯に書いた幾編かの

詩や散文の財産目録を恭しく差し出す、すると神様は気のなさそうな顔をして、ただ「次」とおっしゃる、そんな内容です。私も将来差し出す目録に載せるために、教養部時代から数えてこの三十年間の京都大学での教師・研究者生活をまとめておかなければならなくなりました。

滋賀大学経済学部で二年教えた後、教養部には、英語教室の教師として赴任しました。入学した京大の元々の学部は農学部でした。珍しいことでしたが、ある日突然父が受験生だった私の勉強部屋に來ました。父は取材旅行で林野庁の森林官の家に泊めてもらって、その人の豊かな人間性に感動して帰ってきたようなのです。おまえも農学部に行って、スケールの大きな人間に育ててもらえ、そう言います。父の口車に乗せられて、農学部に入學してみると確かに魅力的な環境でした。はだしの足を地に付けて思考している、そんな人たちにたくさん会うことができました。あのまま行けば、自分も森林の世話をする浮世離れした毎日を過ごせたに違いありませんが、人生は思うようにさせてくれませんでした。二回生の終わりに始まった大学の混乱した時代に巻き込まれることになりました。あの時代のどの学生もそうだったように、私

も自分なりに思い悩む毎日でした。そんな中で出会った T. S. エリオットの詩とエッセイがきっかけで、文学部の英文科に學士入學しました。生涯にわたる友人宮内弘に出会ったこともあって、結局そこで大学院の博士課程を修了するまでを過ごし、後の専門領域であるシェイクスピアの世界を知ることにもなりました。これが、元々農学部に入學した私が、英語の教師になった経緯です。

森林ほどではないにしても、教養部は牧歌的なところでした。大学の中心から離れた気楽さからでしょうか、教師にも事務官にものんびりとした趣がありました。そうした雰囲気は伝わるのか、學生たちにも個人を越えた大きな発想がみられ独特の伸びやかさが感じられました。教室や廊下はいたる所にビラが貼られ、トイレも薄暗く古びていましたが、そこには不思議な暖かさがありました。現在の吉田キャンパスはすっかり綺麗に化粧直しされましたが、その陰で大切な何かが失われたように感じてなりません。そんな油断のできる環境で、生涯の一時期を過ごせたことは何より幸運なことでした。

大学の語学教師というのは、妙な立場でした。教室では使命として語学を教えるのですが、研究室では自分の専門である演劇の研究をします。つまりは、二足の草鞋を履くことになります。人によっては、これを苦痛に思うのかもしれませんが、私の場合は、むしろ自分のエネルギーになったと思っています。研究者の日常は単調で孤独なものです。研究に行き詰まったようなときも自分しか頼りになるものはありません。そんなときに語学

を教えるという、もう一つの立場を与えられていたことは実にありがたく、おかげさまで心を健康に保つことができました。

言語を教えるとは、ときに言葉や文章を教えることだと誤解されることがよくあります。いえ、こう書いています私自身初めはそう思っていました。大切なのは、言葉の向こうにある現実だとわかったのは、語学教師として歩みはじめてしばらくしてからでした。向こうにある現実が大切だと言っても、伝達される内容の方が重要で、言葉自体には意味がないということではありません。言いたいことを心に初めて持ったときに、人間はそれを必死になって何とか他人に伝達しようとしたことでしょう、声を使い、表情や身振りを加えて。しかしそれでは複雑なことは伝達できません。そこで言葉という共通の表現手段を考え出し、更に規則をもった文章を使うようになりました。ところが、これがいけませんでした。次第に言葉や文章が存在感を増し、あたかも言葉や文章が先にあったように錯覚しはじめたのです。皮肉なことに、そうした言語表現に長けた知的な世界と関わりが深い人間ほど、その錯覚は大きくなりがちです。結局教室では、学生たちにこの錯覚を正し、言葉や文章の向こうにある人間的な現実を目を向けることを教えたが、それは現実から、ときとして離れがちな研究生生活を送る自分に同じ現実の大切さを再確認させる機会ともなりました。語学を教える機会を得たおかげで、特殊な環境の中に身を置きながらも、人としての自分を見失わずにすんだと思っています。

京都大学での年月を今振り返り、言葉の価値と空虚さを見つめつづけた日々だったと感じています。この事実を私の財産目録に書き込みたいと思います。神様が次に順番を待っている人を呼ばれる「次」という声が遠くから聞こえてきます。長い間、こんな私を暖かく見守ってくださりありが

とうございました。

(よだ よしまる)

タコツボからの脱出

大木 充（認知情報学系）



これまで学生として3つ大学、教師としても3つ大学にお世話になりました。

それぞれの大学、いいところも悪いところもありました。教師になって

からの専門研究分野も言語学から外国語教育学に変えました。長くやっていた言語学も、統語論だけでなく、関連分野である音声学やノンバーバルコミュニケーションにも手を出しました。成功もありましたが、失敗もありました。大学を変えたり、専門を変えたりして、まわりのみなさんに少なからず迷惑をかけたことをこの機会にお詫び申し上げます。以下の話しは、私のこのような人生と少しだけ関係しています。

みなさんは「タコツボ」と聞いて、何を連想しますか。タコにはなぜ壺のような狭いところに潜り込む習性があるのでしょうか。それはおそらくなによりも身を守るためでしょう。そこにいるかぎり、安心して暮らせる。では、みなさんにとっての「タコツボ」は何ですか。いろいろなタコツボが思い浮かぶでしょうが、その中に京都大学、総合人間学部、自分の専門、ゼミなどは入っていませんか。タコツボは外敵から身を守ってくれる反面、タコツボの外の世界が眼中に入らないという欠点があります。タコツボの中にいれば、日々平穏無事に暮らせる、それで現状に満足してしまう危険性があります。これが問題なのです。

タコツボに長いこと閉じこもっているとどんな弊害があるのでしょうか。私が現在専門にしている外国語教育の研究を例にして見てみることにします。以下に紹介するのは日本で「キャロルの時間モデル」と呼ばれているものです。このモデルはハーバード大学の John B. Carroll が外国語学習の観察に基づいて考えたものですが、外国語の学習だけでなく、学習全般に適用できるものです。キャロルは、学習の達成度は「学習に必要とされる時間」に対する「実際に学習した時間」の割合で表すことができると考え、学習の達成度を次のような分数の式で表しています。

$$\text{Degree of learning} = f \left(\frac{\text{time actually spent}}{\text{time needed}} \right)$$

この分数を見ればわかるように、分母「学習に必要とされる時間」を小さくして、分子「実際に学習した時間」を大きくすれば学習率は上昇するのです。ですから、「学習に必要とされる時間」を小さくすることができなければ、「実際に学習した時間」を増やせばいいのです。あるいは、「実際に学習した時間」を増やすことができれば、「学習に必要とされる時間」を小さくすればいいのです。キャロルは、「学習に必要とされる時間」を左右する要因3つをあげていますが、ここではそのなかのひとつ「教育の質」という要因について少し詳しく見てみることにします。「教育の質」は、「できるだけ短時間に効果的に学習者が学べるような

課題を作成し、提供する」ことによって実現します。巷にでまわっている「英語上達法」に関する本も含めて、従来の外国語の授業改善のための工夫はこの点に焦点をあてていたように思います。これまでの外国語教育、特に大学の英語教育に関する研究も、「教育の質」をはじめとする「学習に必要なとされる時間」を左右する要因の研究に偏っていたように思います。つまり、分母の「学習に必要なとされる時間」を小さくする努力ばかりをしていて、分子の「実際に学習した時間」を大きくする工夫や研究をしていない。学習の達成度をあげるには、他の方法があることを忘れてしまっている。これこそタコツボ状態です。この状態から脱出するには、分子の「実際に学習した時間」に目を向ければいいのです。キャロルは、「実際に学習した時間」を左右する要因として「学習の機会」(opportunity)と「学習の持続」(perseverance)の2つをあげています。つまり、分子を大きくするには、学習者に勉強する時間を確保してあげるだけでなく、実際に積極的に勉強するように動機づけ(学習意欲)を強化してあげる必要があります。ですから、学習時間の確保の仕方、動機づけの強化も研究対象にすることが可能なのです。

以上は、外国語教育に関する例ですが、日頃われわれはこのような状態に陥りがちです。総合人間学部は、名前が示しているようにさまざまな分野を学び、研究することのできる学部です。でも、総合人間学部にいるだけでは、結局はタコツボに閉じ込められているのと同じです。

タコツボに入ることは、それ自体は悪いことではなくて、むしろいいことだと思います。そこで、しばらく腰をすえてひとつのことに没頭してみる。でも、しばらくたったら自問してみましょう。

世界は本当はとても広いのに
自分はタコツボみたいな狭い世界に閉じこもっていて
そこから出ようとしていないのではないか
他の世界があることを忘れてしまっているのではないか

(おおき みつる)



講座の中国の留学生と一緒に



シドニーでの学会発表で

今は昔

西村 稔 (国際文明学系)



「単位制度粉碎！」というのが我々の世代の全共闘運動のスローガンの一つであった。学生当時、その意味は殆ど何もわからず、学問・教育をもっと自由にせよという程度にしか理解していなかった。しかし、その後教職に就いていささか大学の内部を窺い知り、また自分の研究の過程でヨーロッパ（とくにドイツ）の大学の歴史を探究した後で、ようやく単位制度なるものの問題性に気づいた。

周知のように、近代ドイツは「大学の自由」、「学問の自由」、「教育の自由」の理念の故郷であり、この理念は戦前から我国で主として「権力」（大学当局も含む）に対する抵抗原理と解されてきた。これは戦前の滝川事件をはじめとして戦後の京都大学でも様々な機会に経験してきたところである。そのことは当時の大学闘争でも明確に意識されていた。というよりもむしろ、全共闘運動はいわばそうした栄えある「伝統」を引き継ぐものだと言ってもよい。しかし、他方で「大学の自由」は、放歌高吟、弊衣破帽の旧制高校的な、あるいは新制大学における「京大的」な自由なのだという解釈も連綿として続いてきた。これにも反権力的ニュアンスが含まれていたが、大学の公式のカリキュラムに対する反撥、「サボる」自由、美しくいえば、「自己陶冶」としての教養という色彩が強かった。そしてこの意味の「大学の自由」が教養主義とともに崩壊しつつあったのが1960年代後半であり、

全共闘運動をそうしたパースペクティブの下で捉えることも可能である。全国に吹き荒れた大学闘争の嵐が、おりから高度成長に向う日本において大学がエリート的性格を失い、進学率の上昇とともに学生が大衆化していく中でのプロテスト（もはやエリートではない学生の、特権にあぐらをかく教授に対するルサンチマンの現れ）であったとする学者の見解は、部分的にあたっているかもしれない。しかし、これには二つの留保をつけておかなければならない。

一つには、我々の世代はまだ「貧しさ」を知っていた。具体的にいえば極めて優秀な学生が家庭の事情で大学進学はおろか、高校進学ですら諦めたという事実を見聞していた。それは現在の格差社会などという生易しいものではなかった。そうした中でぬくぬくと学問にうつつをぬかしている大学教授に対する批判（「研究室ではマルクス主義、街に出れば資本主義、家に帰れば封建主義」）が繰り広げられたが、しかし学生自身も同じようなものであった。教授への攻撃はたちまち自分に撥ね返ってきた。この一種の後ろめたさが社会の矛盾に対する倫理的告発となって現れたのだ。後から歴史を見る人間は、たとえばテレビの普及に貧困の相対的解消を見るが、しかし歴史の中に生きていた学生にとっては、テレビなどあってもなくてもよいものであり、たかだかパチンコと麻雀しかなかった学生の娯楽に一つプラスされただけのものであった。我々はまだ多くの人々と貧しさを共有することができ、それにもかかわらず大学という特権的施設に住まわせてもらっているとい

う「負い目」があった。だからこそ「自己否定」もまた当時のスローガンの一つとなり得たのである。

いま一つの留保は「自己陶冶」という観念に関わっている。本来、大学は一定のカリキュラムの下でその時々最先端の学問的成果を学生に伝授する役割を担い、それを通じて卒業後の進路のための一つの「資格」を付与する機関である。その制度的なあり方は国や時代によって様々である（たとえば19世紀のドイツでは単位制も学年制もなかった）が、日本の場合、戦後アメリカの影響の下で、大学教育はおおむね専門教育と一般教育に分けられ、現在に至っている。後者、つまり教養教育が重要であることは繰返し説かれてきた。しかし、教養教育が如何にあるべきかということについてのコンセンサスは現代の教員の間にはない。現代だけではない。かつてもなかった。そこに「自己陶冶」という観念が大正教養主義あたりから普及する間隙があった。制度化されない教育である。大正時代の教養は古今東西の古典の読書であったが、昭和初期から1960年代に至るまでは主として社会主義がその代替物となった。大学でマルクス主義を講じる教授もたくさんいたが、学生たちは自分らの間でも「学習」したのだ。その背後にエリート臭を嗅ぎ取るのは容易であるが、かの「負い目」と相俟って、社会主義（実存主義や古典を含めてよい）の学習はある程度まで自己陶冶となり得たのである。

さて、こうしたことが単位制度とどのように関わるのか。単位制度は、アメリカ的効率に基づいた大量生産の道具であり、まさに大衆化した大学にふさわしい。しかし、それはとりわけ専門教育にとって不可欠であるように見える。医学教育がその典型である。我々は一定のカリキュラムを消化していない医師に身を委ねるわけにはいかない。それに対して一般教育は単位制度になじまな

い。現代の教養論でもいまだに、文化系学生に理科系の、理科系学生に文化系の学問・知識を賦与し、それにより「全人」を育成するという構想が語られるが、「博識」な人ならいくらでもいるけれども、真善美を兼ね備えた「全人」にはお目にかかったことがない。一般教育にできることは、知識のほかに思考能力や判断力に関して自己陶冶をバック・アップすることではしかない。我々は天才でもない限り、何かをひたすら追求するという意味の「専門人」を目指すほかないが、この追求こそがかえって人格を磨くことに通じる側面があるように思われる。

「単位制度粉碎」など、大学設置基準がある限り、今も昔も夢物語ではしかないが、野暮を承知でいえば、一般教育につき選択科目数を減らし、少数の科目について時間数を増やす工夫は現行制度上充分可能であろう（こういう点でなぜアメリカを模範としないのか理解に苦しむ）。「京大的」自由もよいが、そろそろ「サボる」自由を自己陶冶の充実に変換する時期がきているのではないか。かくいう私は、教養の授業は人並みにサボり、専門の授業はゼミ以外は殆ど出席しなかったが、教師になってから専門知識の不足のためにひどく難儀した。「今は昔」である。

（にしむら みのる）

金屏風発見始末

松田 清（文化環境学系）



25 年前、教養部にフランス語教師として赴任した。その時いただいた研究室は A 号館（現在の吉田南総合館の前身）3 階東の時計台に面した大きな部屋であった。それまでフランス語中央室として使っていたということで、天上も高く中二階もある。赴任前、教養部で内ゲバのため教育学部生が殺されたニュースを知り暗い気持ちになっていた。その現場が研究室のすぐ左隣であることは後に知らされた。あるとき花束が置かれていたこともある。かつて時計台の文字盤の下に白く大書された「竹本処分粉碎」の文字は、もうとっく消されていたように記憶する。窓のすぐまえの尚賢館（今の総合人間学部棟の位置にあった大正初期の木造建築）は、毎朝トラックで乗り付けてくるヘルメット姿の党派集団がながらく拠点としていた。昼間は彼らのアジ演説、夜は階下の歌舞音曲を聞かされながら、このキャンパスでの研究生活が始まった。深夜はさすがに怒り心頭に発し階下へ降り、なんと怒鳴りつけたことか。明け方の下手なピアノ練習にも悩まされた。調べてみると研究室は 1935 年建築の旧制三高新館の講堂を仕切った一室であった。中二階の謎が解けた。

赴任 3 年目の 1989 年 4 月から 1 年間、オランダの I.A. Ailion 基金によるライデン大学の招聘を受け、蘭学資料の研究に従事させていただいた。当時のフランス語教室の懐の深さに今でも感謝している。その年の 7 月 3 日に尚賢館が焼失した。しかし、それを知ったのは翌年、帰国が近くなりオランダ語会話の習得を断念し古本屋巡りを始めた

頃だったと思う。目と鼻の先にある研究室の蔵書が心配でたまらなかったが、帰国して無事を確認した。その後も昼夜の喧噪は相変わらずであった。調査研究は佳境に入ったというべきか、帰宅すると「今日は何の発見？」と愚妻にからかわれた。

1995 年 6 月 22 日、梅雨の間の暑い日差しが照りつける午後だった。何気なく階下の東口へ降りると、壁面に汚れた大扁額が数枚立てかけられていた。丁度、尚賢館焼失の際類焼を免れた倉庫を解体したばかりであったが、近くで作業をしていた用務員の山田老曰く、その二階から出てきた、という。京都帝国大学総長荒木寅三郎の「吾道一以忍之」、興南錬成院長幣原^{しではら} 坦^{たいら}の「行天道」、海軍大将有馬良橘の

「健闘練心膽」、満州国國務總理大臣張景恵の「興亜 為三高生」。いずれも、1943 年 11 月大東亜会議が東京で開催され、三高で張景恵が講演をした頃のものと思われる。三高史料として後世に伝えるべきであろう。このとき扁額と一緒に、「金屏風 壺雙 第三高等学校」と墨筆大書した大型の木箱が見つかった。しかし、それを取り出して広げる余裕もなく貴重資料として保管を依頼し



写真 1 金屏風収納箱蓋の墨書
2005 年 6 月 29 日、図書館会議室にて



写真2 左から富田博之学部長、大入達男社長、堀悦明会長（中央）、中村祐子補佐員、織田陽掛長
2005年6月29日、図書館会議室にて

たものの、その後所在が分からなくなってしまった。

10年後、2005年6月21日、総人図書館の織田陽掛長が地下書庫で金屏風を見つけられ、27日に通報して下さった。さっそく現物を確認し撮影した。木箱の蓋裏には「大正五年三月十参日 新調」の墨書と「京都市御幸町通御池南入 堀至善堂」の商標付きラベル。これをたよりに同日夕方、京都市役所前の堀金（堀金箔粉株式会社の通称）を訪ね、堀悦明会長に写真をお見せしたところ、確かに先々代の堀新太郎が製作したものとの証言をいただいた。6月29日、図書館で金屏風に対面された会長のお話を以下に要約しよう。

金箔サイズは1枚127mm角。おそらく三号の金箔。一般的には金の純度が944/1000だが、これは960/1000～970/1000と非常に高い。金箔は大正時代に良質のものが作られ、大正中頃の箔が一番良い。大正のあとは大量生産のため良い箔は作れなくなった。この屏風の箔は貼り筋がほとんど分からない。屏風は斜めから見るので貼り筋が目立ちやすいが、これだけ目立たないとは非常にすばらしい。これだけの箔は今もう作れないし、これだけの技をもつ職人もいない。昨今ホテルなどで使用されている金屏風はアルミ着色で純金ではない。屏風は年月が経つと下の木の棧が痩せて、四隅に皺がいくものだが、これは経過年のわりに皺がすくない。縦での保管がよかった。横に寝てい



写真3 収納箱蓋裏の墨書と堀至善堂ラベル（下部の貼紙）、展開した三高金屏風
2005年7月26日、図書館2階大閲覧室にて

たら箔同士がくっついていただろう。

7月1日、堀金のお店に『堀至善堂製三高金屏風記録写真』と題したアルバムを届けに行き、会長から大正時代までの金箔製法について面白いお話をうかがった。

19センチ四方の本紙^{ほんがみ}を1300枚ほど重ね、猫革で締めたものを男女一組になって金槌でたたく。女ものの金槌は小さい。現在は本紙をほとんど使用せず、カーボン紙を使う。本紙は名塩製^{どろまにあい}の泥間似合紙で、表裏を区別するために、表側に「第四十二号」などと漢字が印刷されている。金箔を下にして、本紙の表から金槌でたたくと、本紙の簀の子目が金箔に移る。この本紙の使い古しが最高級の油取り紙。昔はこれを祇園へ持って行くと舞妓さんによくもてたという。

京都の職人が技をこめた金屏風は大正5年（1916）以来、数多くの三高生を送り出したあと、三高の廃校とともにお蔵入りになったようだ。戦後の教養部の苦難の歴史をへて蘇ったこの金屏風は2006年の春、富田博之学部長のとき、総合人間学部と人間・環境学研究科の卒業証書授与式に初めて使われ、それ以来新しい歴史を歩みだした。今年も、そしていつまでも、純金の重厚かつ厳粛な輝きのまえて、歴史をにやう若人が巣立つことを祈念して止まない。

（まつだ きよし）

好奇心を磨くことから一步が始まる

山田 孝子 (文化環境学系)



定年退職を迎えるにあたって、平成9(1997)年4月からの15年間があまりにもあっという間に過ぎてしまったという思いを抱いているところである。理学部入学以来の学

生・院生・研修員としての18年間と、その後の総合人間学部に着任して以来の教員としての15年間の計33年間、京都大学にお世話になったことになる。研究者として道を踏み出した当初には、京都大学に教員として戻るなど考えてもいなかったことであり、不思議な縁を感じながら、大学を去る日を迎えようとしているという心境にある。

英語教育と文化人類学教育という二足のわらじを履いたような変則的な立場から学生の教育にたずさわってきたが、この短い期間のなかでも学生気質が大きく変化してきたことに、時代の流れを感じ、「老兵は去るが如し」そのものである。羽目を外さなすぎ、何かの型にはまることに抵抗のなさ過ぎの学生が増えているという感じ、一抹の物足りなさ、もの悲しさを覚える歳になっているのを実感する。ルールが引かれていないことにわくわくし、興奮していた自分の学生時代を振り返るにつけて、何がこのような違いを生み出してしまったのであろうかと、日本の学校教育のあり方、地域社会のあり方を再考する必要があるのではとまで、ときどき考えることさえある。

理学部数学科を卒業後、人類学に方向転換した一つの背景は、「人間とは何か」、とくに、男女平

等が理念として掲げられながらも、完全な平等にはほど遠い私の学生時代の社会状況のなかで、「男性・女性」というジェンダーによる違いは何にもとづくのであろうかということに興味を抱いたことにあった。ボーヴォワールの『第二の性』や、マーガレット＝ミードの『男性と女性』に描かれるジェンダー像は、当時の女子学生にとって「目から鱗が落ちる」ような、とても刺激的な新しい考え方であった。

当時の理学部校内には、数学教室と動物学教室の間に、自然人類学研究室の看板を掲げた小さな建物があった。人類学への転向を考え始め、自然人類学研究室に足を運ぶようになり、数学教室とは打って変わった土臭さ、人間臭さが一杯詰まった、伊谷純一郎先生を初めとする研究室の雰囲気圧に圧倒され、人類を含めた霊長類社会や、異なる文化を対象とする人類学にますます魅了されたのであった。当時は、まだ、伝統的な生活を維持する社会が各地にあり、異国のまだ見ぬ文化・社会は、興味や好奇心をととても刺激し、若者の心を躍らせたものであった。異なる社会を訪れて調査するというある種の探検心の芽生えが、大学院で人類学を専攻することになったもう一つの理由であった。

自分の学生時代のことを語り出すのは年を取った証拠であると常々思っていたのであるが、好奇心一杯で過ごすことができたあの時代を懐かしくさえ感じてしまうのである。現在は、過多といえるほど情報が満ちあふれ、インターネットやメディアをとおしてあらゆる情報が簡単に手に入る

ようになっている。人類学的フィールドワークをするまでもなく、辺鄙な土地に暮らす人々の様子さえもメディアをとおして私たちの居間に侵入してくる時代となっている。未知のものが非常に限られてしまい、若者が素直に好奇心をもつことも難しくなってしまったのであろうかと考えてしまう。しかし、人類学のフィールドワークをとおして、人と人との直接的接触や交流、自ら現地に足を運ぶことは、映像、写真、文字情報で得られるものより数十倍も、あるいは数百倍も多くの情報を与えてくれること、新たな好奇心を刺激してくれることを経験してきた。

たとえば、シベリアのサハの人たちの「一家総出の干草作り」の写真が一枚あるとしよう。その一枚の写真の背後には、サハの生活にとって乳牛の飼育は欠かすことのできないものであること、一年のほぼ三分の二が雪で覆われ、冬の最低気温がマイナス六〇度にも達する極寒の地での牛の飼育には夏の間の家族総出の干草作りが不可欠であること、夏には、どの村も日中は干草の大山（約三～四トンの重量）作りのため、人々が出払い、閑散になってしまうという、彼らの夏の生活がある。そこには、極寒の地での家畜飼育の問題点が凝縮されており、現地での体験によってはじめてそのことが実感できるものといえる。学生たちには、もっと人と人の接触・交流をとおして、自分の

好奇心を磨いて欲しいものだと思ってしまうのである。

長期間のフィールドワークを基本的な方法論とする文化人類学には、このような学生気質の変容や社会情勢の変化により、研究そのものに大きな変化が押し寄せてきている。そもそも、長期にわたる不便な生活を望む若者が少なくなっているだけでなく、未知な領域がますます狭められ、人類学徒が新たな独創的なテーマを選び取ることさえも難しくなっている。現代は、好奇心を磨くということがとても難しい時代となっているということもできるが、好奇心はとてつもない奇抜なことによってかき立てられるだけのものでもなく、実際には、身近な現象や出来事に疑問をもつことから始まるものである。日常のなかで好奇心を磨くことがまずは一歩であるといえる。それによって、それまでの生活も違った色に見えること請け合いである。

（やまだ たかこ）



サハにおける一家総出の干し草づくり（1999年）



四川省甘孜藏族自治州にて（2006年）

万感の想い抱き我ここを去る

金坂 清則 (文化環境学系)



軽さが何よりも尊ばれる時代である。反してこの表題はあまりに古めかしい。また何か未練があるかのような誤解と印象を与えそうな点もよくない。未練など全くない。あるのは夢であり希望で

あり全体としての満足感である。ではなぜこの表題……？

今、全体としてと記したのは、苦勞して発見し紙誌に発表した事実や研究の根幹をなす方法論・アイデアを隠蔽したり真の意義が読者にわからないようにした作品、つまり学生に対してであれば「このようなことをしてはならない。先に研究した人の立場になってみるのが研究の出発点である」と指導できるのに、そうはできない作品が、この20年あまり私が研究の柱の1つにしてきたイザベラ・バード論に関わっても巷^{ちまた}に次々と出てくることによる精神的苦痛が続く一方では、石弘之さんが私が見い出したことに関わって電話下さり、大著『名作の中の地球環境史』(岩波書店)に紹介下さったようなうれしいことがあるし、バードをめぐる独自の視点から geographer として研究し活動する意義を認め、力添え下さる人々が世界に次々と現われ、おかげで当初予想もしなかった展開を写真展^{*}に関わって図ることができ、将来に繋げていき得るとの見通しをもつからである。

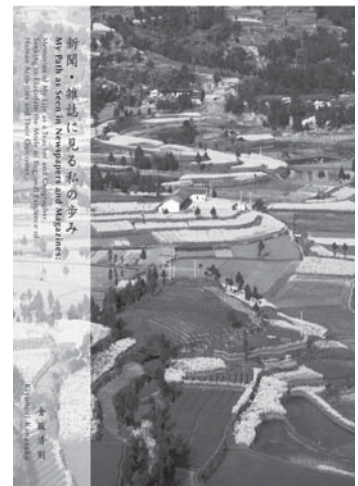
^{*}“In the Footsteps of Isabella Bird: Adventures in Twin Time Travel”. google.yahoo や『新聞・雑誌に見る私の歩み My Path as Seen in Newspapers and Magazines: Memories of My Life as a Teacher and Geographer, Seeking to Elucidate the Mode of Regional Existence of Human Activities and Their Outcomes.』(私家版、本学人環・総人図書館蔵)を見て下さい。

また、博士課程を卒えた翌日から37年間一中学校と予備校で非常勤講師をした院生期を含めると42年間一を単なる知識でない事柄を人に伝える仕事に就け、そのおかげで世界を旅し数えきれない人々と巡り合え、研究と教育に生かすことができ、最後は漠たる憧れと夢を抱いて入学した大学のそのキャンパスで、学校の先生になりたいという小学生の時以来の夢を叶えることができたからである。

着任した1996年に本誌No.15に「偶然の重なりの中で—私の地理学研究—」と題する小文を書いた私は、本年2月11日「偶然の光明—私と地理学、私の地理学—」と題する最終講義を時計台記念館で行い、祝賀会を開いていただいて教職の仕事が無事卒えることができる。ありがたいことである。

翻って、私の学問と人生に大きな示唆を与えてくださった青木伸好先生と足利健亮先生が定年退職前に殉職者のごとくに亡くなられたために退職に当たっての文章を読めないことは、もし書かれていたなら必ずや強い印象と刺激を与えたであろうと思われるだけに無念である。表題にはこんな想いも込められている。両先生の事績の一端については足利先生の発案になる教室の機関誌『地域と環境』のNo.10とNo.3を読んでもらえればと思う。

12年間に100人以上の地理学専攻生の卒業論文に関われた福井大学教育学部時代。より多数の学



『新聞・雑誌に見る私の歩み』表紙
(デザインは総人の教え子小淵千寿さん)

生に地理学の面白さと重要性を語り、その思いを理解してくれる学生と出会えた教養部や、文学部の矢守一彦先生に請われて積極的に関わった後、教養部改革の中で移った文学部に人文地理学講座（実験講座）を創設できた9年間の大阪大学時代。結果的には最長の16年間を過ごせ、全学共通教育、総合人間学部、人間・環境学研究科に関わる教育に従事し、多様な授業を通して幾多の有為な学生と繋がりをもつことができ、6年間は京都大学応援団の顧問をしたおかげで硬式野球部の東大戦や神大戦の始球式までも楽しめた京都大学時代。いずれが欠けても不完全になった教職生活だった。このような経過は、中学生の大半が使う『中学校社会科地図』の編纂に長く関わってこられた喜びとも連動する。大学院の受験を勧めて下さったのみならず、この仕事にお誘い下さった浮田典良先生もまたこのキャンパスで大きな事績を残された先生だった。

だが、他部局のほぼ同年代の教員と会って私が地理学をしているとわかった時にきわめて高い頻度で話題に上る人は、藤岡謙二郎先生である。教養部の歴史に名を刻む名物先生だった。そのエネルギーは凄まじく、様々な面に及んだ。ただそれだけに後に解決を迫られることも生じた（それらから逃げてはならず、教室の歴史も紡げない）。

その最たるものは、先生が収集し置いていかれたコンテナにして60箱もの遺物（ほとんどが考古遺物）の根本的解決という問題だった。北は北海道の奥尻島から南は鹿児島県甬島に及ぶ現地の機関にお返ししたいという私と小方登・小原文明両氏の原案を是とされた国際日本文化研究センターの宇野隆夫教授と我々の講座の教授でもある奈良文化財研究所の松井章先生の支持に力を得て多数の関係機関に電話などでお願ひし、最終的に全国16の関係機関に引き取ってもらえ、喜んで頂けた時の安堵感・達成感は今も鮮烈である。

『地域と環境』No.11は、引き取ってもらえただけでは不十分であり教室の記録としてとどめておかねばならないと考えて、再度お願いして執筆頂いた遺物の概要説明と、問題解決の経緯、宇野・松井両教授の総括に加えて、遺物の中にあった甬島に関する藤岡先生他の調査団員撮影の古写真を

ツイン・タイム・トラベル（twin time travel）という私が提唱している考え方で生かしたフィールドワークの成果報告から成る。図書館で手にとって頂ければ幸いである。新しい旅の形を発見し楽しむヒントも得られるに違いない。調査に誘った優秀な学生2名がこの調査を機に我が地域空間論分野を専攻することになったこともうれしいことだった。

実は私には更に厳しい偶然もあった。最悪の偶然は2004年7月22日朝5時46分、東大路二条の路上で起こった。ある事情で夜9時に研究室に車で出直し、徹夜で仕事しての帰宅の途中、信号待ちをしていた私の車は大型乗用車に真後ろから激突された。時速70キロ、ノーブレーキ、居眠り運転。

もし一瞬前にふとバックミラーを見、「これでおしまいか」と思いつつも「することが残っている。エディンバラにも行かねばならない。死んではならない」と思い、本能的に力の限り腕と脚で踏ん張らなかったなら、そして元々サイドブレーキをひいて停車していなかったなら命を落としていたであろう事故だった。車は全損。通常の治療を続けた半年後には激痛の余り右腕を切り落としてほしいと思うまでの症状に苦しんだ。だが鍼と指圧によって何とか解決できた。事故の20日後に渡英し国立スコットランド図書館で打合わせできなければ、結果的には2005年から2011年の間に4カ国10カ所で延べ2年開催された私の写真展はなかった。今年1年をかけて刊行される拙訳注『完訳 日本奥地紀行』全4巻（平凡社東洋文庫）は写真展活動や地理学と直結する。原著の面白さや意義は、英語を日本語に置き換えるだけで旅の本質や一文一語の意味を解明せず研究を欠く既往の訳書では実はほとんどわからない。

（かなさか きよのり）

帰 還

内田 賢徳 (国際文明学系)



還って行くところがあるように思われる。

「ところ」は、特定の場所でもないし、時でもない。ある情緒、例えば春が特別のことであった年に、長い冬から開かれて

いく光を浴びているような晴れやかな気分。それはまた、自己が何者でもなかった、何を目指そうとしていた訳でもない、精神の揺籃期に萌す、まだ希望でもない何か。

職を離れることの寂しさが、回想を遙かな時期に追いやっているのではない。なんともせいせいした気分と言えば、負ってきた責務に照らして、職場には申し訳ないことだが、この終わりは解放である。

そんなに辛かったのかと問われれば、いいえ、むしろ楽しかったですねと、過ぎ来し日々を振り返るであろう。それは、つらさ、難儀といった諸々を越えて行く自己を祝祭する日々でもあり、独特の身の処し方も板に付いてきて、祝祭の後の宴はとりわけ楽しかった。語り合いは諧謔を伴い、昂揚もあった。

大学の教員とは、自己を振り返ってみても、斜に構えて言えば、いびつな個性がなまじいに天職を得たと思っている、社会では受け容れられそうもない者たちの集団である。達成感は時に病症ですらある。しかし、研究の方ではなく、教育は、そうしたいびつさが真の個性として容れられる大事な機会である。教養部時代から二十五年間、同一

の講義名のもとに続けた講義の試験を終えた時、二十五年に亙るこの講義の、諸君は最後の受講者でした、憶えておいてくださいと挨拶して教室を出た後、幾人かがそれぞれに私を呼び止めて、ありがとうございましたと告げてくれた。それが彼らになにがしかの利をもたらすわけではない。瞬間に自分の教育は間違っていなかったと実感した。教養教育を担当してきたことがたまらなくうれしかった……。

職業を持つことは若年期の大きな目的である。何かになりたいと言う時、その何かは、なれそうもないものも含めて、概ね職種である。何かになるとは、自己を何者かに限定することである。さらに限定は、社会の中に収まりの好い位置を求めることであって、それらは、自由のように見える職種でも何らかに社会の組織体に関わっている。例えばオーケストラの指揮者は、楽団員とは異なる自由業（音楽家）であるが、楽団からの指揮依頼をひたすら待たなければ、職業として成り立たない。職業となるとその営みからたつきを得なければならない。自らはそれを志向せず、いわゆる扶養家族になる道もある。しかし収まりの好い位置と言えるようなそれ（俗云玉輿、亦云逆玉輿）を占めるとなると、よほどの手練手管が必要で、それと比べれば、そこそこに職を得て、収まる位置を占める方がたやすい。

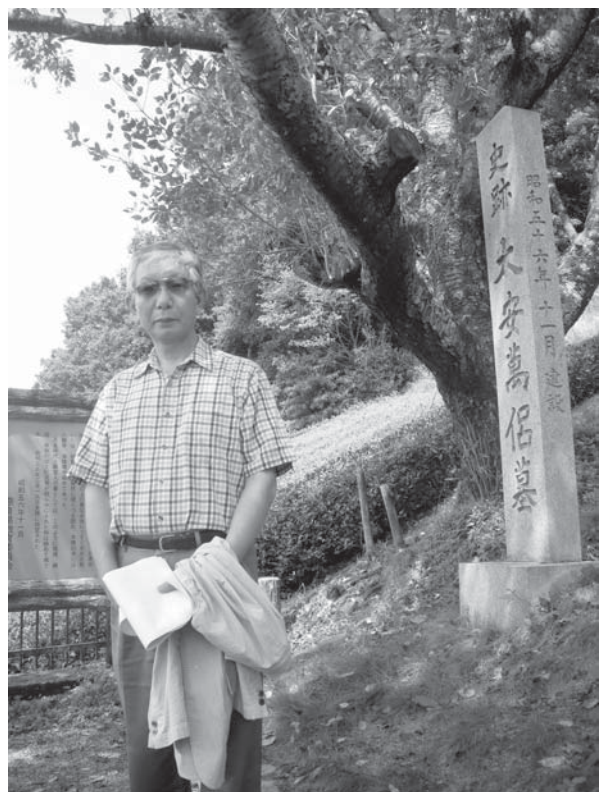
どれにせよ、収まりの好い位置を占めるには、努力が必要となる。寓話の中のアリのように、努力それ自体が目的化して、真の目的からは常に疎外さ

れているか、一方のギリギリのように、達成が享楽として先行してしまい、冬の寒さの中で、予め絶望的と決まっている努力を強いられるか、その極端な二つの合間に揺れながら、現実の努力はある。従って努力とそれに耐えることは、若年期の美德と称えられる。ただ、苦難に耐え、苦勞するにはそのための才能が必要であろう。ギリギリに欠けていたのは、その才能であったし、一方のアリには逆にそれが過剰にあって、そしてそれだけであった。達成ということを目指さない努力は、疎外でしかない。大尽となったアリが、座敷に今は苦界に身を落としたギリギリを呼んで、その「ありんす」ことばを笑うといった後日譚はありえない。

出発と共に努力が始まった。どちらかと言えばアリに似て、つまりギリギリのように成果を先取りする機会などなかったから、当て処もなく日々に追われ、本当にこれでよかったのかと振り返ることもなかった。しかしもうその必要は、皆無ではないにせよ、比較にならないほど少なくて済む。新しい出発や再出発があるというのではない。別の人生などあるわけもない。また自分を取り戻せるというのでもない。自分らしくあるという努力からも解放されて、自己とは何かという若々しい問いに閉じ込められた時間に戻ることはもうないだろう。自分らしくなくてもよい、そんな時間がどんなことであるのか、見えているわけではないにしても、まだ何者でもなかったところへと還ってみるという想像はどこか楽しい。何も書かれていない白いノート、これから書こうというのではなく、書くことの果てに辿り着く白さ、それはまた元の白さに還っていくということでもある。

退任とは、撤退や退去ではない。それはなつかしい帰還である。

(うちだ まさのり)



太安万侶の墓地にて（顔写真の約20年後）

教養部から総人・人環へ

山口 良平 (自然科学系)



私が総人・人環の元部局となる教養部に赴任したのは、平成元年（1989年）と覚えやすい年でした。以来、23年間このキャンパス（現在は吉田南キャンパスと呼ばれている）でお世話になり、研究・教育活動を続けてきました。この3月に定年退職の運びとなり、振り返ってみると時代の変化とともにいろいろな出来事があったものと感慨深い。

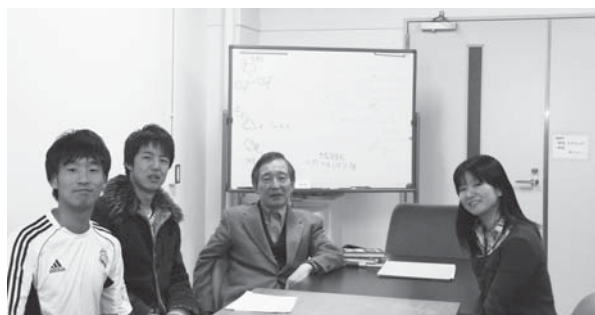
当時の教養部では、2回生までの全学の教育を引き受けており、私が担当していた化学の授業は、化学2A（非化学理系学生向き、1年間）、化学2B,4B（化学系学生向き、2年間）、化学実験1（1回生向き）、化学実験2（2回生向き）でした。まだ、学生運動が盛んで、何回かロックアウトされて、楽友会館で教授会をした覚えがありますが、それ以外は比較的平穏で牧歌的な感じでした。しかし、それが2、3年のうちに大きく変わろうとは赴任した時には予想もしませんでした。

教養部改革・教育大綱化の時代の波に乗り、まずは1991年に大学院人間・環境学研究科が、1992年に総合人間学部が設置され、我々教養部の教職員はいずれかの部局に所属することになりました。それとともに、教養教育は1年に短縮され、総合人間学部が責任部局となって、我々教員（当時は教官）は教養教育、学部教育、大学院教育の3つを担当することになり、負担は大きくなりました。しかし、やはり学部・研究科独自の学生・院生と一緒に教育・研究ができることには何ものに勝る

喜びがありました。また、人環・総人の教育研究の目的理念も「環境との調和、文理融合」という時代の波にのったもので、教養部時代とは違って、目的意識が明確になったことも大きな利点と思っています。

次に大きな出来事は、2003年の総人の学科再編と総人と人環の一体化（大学院重点化）でした。この組織再編によって、名実ともに人環・総人が大きく発展する契機になったと思っています。最初の人環の専攻・講座の構成は文理融合の理念を追求するためもあってか、専門分野が複雑に入りまじった構成でありましたが（私はそう感じましたが）、大学院重点化・一体化の時に専攻・講座が再編されて、このような複雑な構成が解消されて、私どもも教育・研究がやりやすくなりました。

一方、総人の再編では、それまでの理系2学科6講座[基礎科学科（数理基礎論講座、情報科学講座、自然構造基礎論講座）；自然環境学科（物質環境論講座、生物・地球圏環境論講座、環境適応論講座）]から、物理、化学、生物・地球科学の3講座は、自然科学系という、今から思えば、広すぎる学系にまとめられ、目的意識も曖昧になりました。また、「環境」という総人・人環の理念を表す重要なキーワードが抜けたことも、自然科学系を志望する学生が少なくなった原因の一端ではないかと感じています。総人が世間では文系学部と見なされているようで、総人全体の発展のためにも、自然科学系の名称変更・再編なども一案かと思っています。



学部科目：分子反応論の最終授業に於いて

また、2003年に全学共通教育の責任組織として高等教育研究開発推進機構（以下機構）が設置され、総人は実施責任部局となったことも大きな出来事でした。教養部・総人がずっと担っていた教養教育・共通教育の司令塔ではなくなったのです。第三高等学校名残の建物のA号館北棟（現在は吉田南総合館北館と呼ばれている）が全面改築されたのもこの時です。この出来事には個人的に大きな思いがあります。当時、総人の建築委員会委員長を務めており、全面改築に当たり、北棟の研究室、事務室、図書室、そして学生のサークルBOXの避難先の確保に当時の宮本盛太郎学部長とともに走り回ったことです。

以前から老朽化した北棟の改築要求を出していましたが、本部では中々認められませんでした。それが、やっと認められ、避難先などを確保し、改築が始まる直前で、それが（残りのA、D、E、F号館も含めて）設置される機構の所属となることになり、「鳶に油揚げをさらわれる」ような気分でした（最近の京都大学新聞に学生の視点からの記事が載っています）。この他にも、機構のある強硬な職員との折衝や総人と人環の一体化における教員・院生の使用部屋の格差問題の是正など、いろいろな事がありました。

教養部から残っている教員がどんどん減り、教養部から総人・人環への変遷についてもはや過去の出来事になった感がありますが、それにまつわる思い出・感慨を少し述べた次第です。

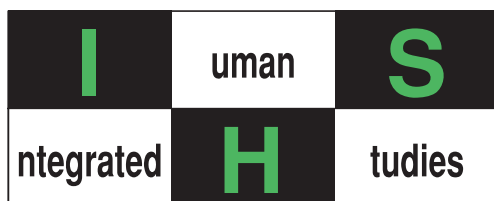
前にも触れましたが、学部・研究科独自の学部生・院生の教育を行い、一緒に研究ができることは、新組織になって赴任した方は当たり前かと思うかもしれませんが、教養部時代から在任している私にとっては実に素晴らしいことだと思っています。一体化後のこの10年間は比較的落ち着いて、研究・教育に専念できる時期でありました。部局の設立理念にもなっている「環境との調和」をキーワードに、環境と調和する分子変換・触媒反応、いわゆるグリーンケミストリーの一端を実現するという「目標」「目的意識」を明確にして、研究も大いに発展しました。この定年退職までに少しはこれらの目標を達成し、この分野に貢献できたのではないかと、内心自負しています。これも良き共同研究者と多くの大学院生・学部生の協力の賜とたいへん感謝しています。研究室の特長と言えば、優秀な女性学生が多かったことです。今まで、学部・大学院を通して、50名以上の学生と共に研究をしてきましたが、その2割以上は女性学生であり、化学系の研究室では珍しく、環境への関心の高さ、研究へのひたむきさ、粘り強さを感じています。



2011年4月、研究室全員写真

以上、定年退職を迎えるにあたり、いろいろ思い出すことを書いてみました。23年間お世話になりました総人・人環に感謝致しますと同時に、益々の発展を願っています。

（やまぐち りょうへい）



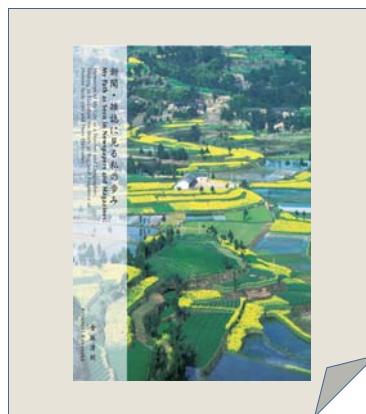
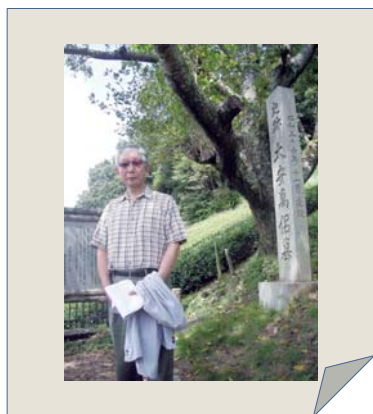
編集後記

◆『総合人間学部広報』第49号をお届けします。今回の特集ではどの先生の文章からも、総合人間学部・京都大学への深い愛情と、教育・研究への熱い想いが伝わってきます。先生方にはご退任ののちも、総合人間学部を暖かく

くまた厳しい眼差しで見守っていただきたく思います。長い間、どうも有難うございました。

4月からは新しい学生と教職員を迎え、総合人間学部も新たなスタートを切ります。ご退任の先生方からの激励を糧に、溢れんばかりの熱意をもって学修・教育・研究に取り組んで総合人間学部の一層の発展を図りたいものです。

(M・S)



人間・環境学研究科
総合人間学部

広報委員会